

→アゼルバイジャンの裁判官たちとの会議は、しばしば技術的な話題になる
と熱気を帯びた議論へと発展した

写真提供：筆者（いづれも）



ジャ パンファウンダー
シヨンの知的交流
フェローシップでの派遣により、
今年2月から約2カ月間、私は
アゼルバイジャン共和国の首都
バクーで現地調査を行なう機会
を得ました。調査課題は「アゼ
ルバイジャンの難民法」でした。

アゼルバイジャンは、1999
年のソビエト連邦解体とともに
に独立した新しい国家です。ナ
ゴルノ・カラバフ紛争（88年にア
ゼルバイジャン領内のナゴルノ・
カラバフ自治州のアルメニアへの
帰属変更を巡って開始された紛争）
により約100万人のアゼルバ

した。3月中旬のある晴れた日、
私は、ヤサマル地方裁判所の所
長室に招かれました。互いの自
己紹介のあと、所長はこう切り
出しました。「法の支配の下で、
一定のルールに従い判決を下す
ことが我々裁判官の任務であ
る。我々はそれをやってきたし、

我々の仕事に問題はない」と。
改めて文章にすると木で鼻を
くくったような言い回しですが、
実際は、所長の穏やかな人柄と
柔らかい口調もあって、対話を
ためらう雰囲気ではありません
でした。とはいえ、目の前に
いるのは初めて会う日本人研究
者。警戒したのは当然かと思い
ます。しかし、話の内容が具体
的・技術的になると、所長も同席
した裁判官たちもだんだんと饒
舌になり、やがて私とのやりと
りは議論のレベルに達しました。
アゼルバイジャン人口のおお
よそ10人に1人は、難民か国内
避難民と言われます。この国で
は、紛争や強制移動は小説や想
像のなかの出来事ではありません
んです。ですから、裁判官たちもま
た、難民・国内避難民を現実問
題と受け止めています。ただし、
理解と経験を難民法という枠組
みで活かせるような司法環境が
この国で十分整っているか、と
いうのはまた別です。民主主義
の実践と隣国との関係が、今後、
この課題でも鍵となりそうです。

あらかき おさむ
新垣 修
志學館大学法学部助教授

リレーエッセイ
海外派遣
専門家たより

アゼルバイジャンの祝日

難民法の調査と法曹関係者との出会い



あらかき おさむ ●国連難民高等弁務官（UNHCR）豪州・ニュージ
ランド・南太平洋地域事務所にて法務官補、再定住プロジェクト担当
官などの実務を担当しながら、トロント大学にて修士号、ヴィクトリ
ア大学にて博士号を取得。国際協力事業団（現・国際協力機構、JICA）
のジュニア専門員を経て、2001年より現職。専門は国際関係論、難
民研究。04年にはハーバード大学ロースクール客員研究員として研究。
法務省で難民審査参与員も務める

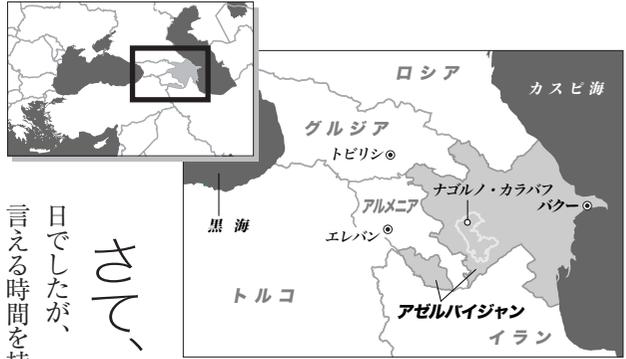
イジャン人が住居地
からの移動を強制さ
れたため、国内避難
民の発生国としてよ
く知られています。
また、「難民条約」
（51年に国連で採択さ
れた難民の地位に関す
る条約）の加盟国で
あり、他国から流入
する難民を受け入れ
る国でもあります。

今回

は法律
関係の

調査ということで、
面会した相手のほと
んどは法曹関係者で
したが、なかでも裁
判官たちとの出会い
は思い出深いもので

↓アゼルバイジャンの祝日「最後の火曜日」には弁護士の自宅に招かれて、家族と楽しいひとときを過ごした



アゼルバイジャン共和国はカスピ海の西岸に位置し、首都バクーは古くから石油の産出で知られる。イスラーム教シーア派が優勢なのに対し、隣国のアルメニア共和国はキリスト教徒が多い。現在、ナゴルノ・カラバフとその周辺地域は、アルメニアに占領され、アゼルバイジャン政府の実効支配は及んでいない。1994年の両国の停戦合意にもかかわらず、停戦ライン付近での発砲事件の頻度が増している

日でしたが、一服の清涼剤とも言える時間を持つこともできました。春の足音が確かになる3月20日ごろ、アゼルバイジャンには、祝日「ノヴルス」(Novruz)いわゆる春分の日)がやってきます。ノヴルスは、人々が厳しい冬の寒さに表象される暗闇に勝利したことを宣言し、春とともに到来する新たな生命の息吹と希望を盛大に祝うときです。アゼルバイジャンでは、ノヴルス当日の4週間前からさまざまな行事が開催され、日が暮れると、

カト

滞在期間中は調査に追われる毎

路地や空地のあちこちでかがり火がたかれ、爆竹が鳴り続けます。

ノヴルス前週の「最後の火曜日」(ラスト・チューズデー: Last Tuesday, Chershenbe)という祝日に、私は、今回の調査でご縁ができた弁護士の自宅に夕食に招かれまして。仕事時の彼は、どちらかというとと真面目一徹の印象。紛争から脱し発展に向かう国にあって、取り残されようとしていく社会的弱者を擁護する弁護士の気概と厳しさを感じていました。しかし、休日に自宅で私を迎え入れ、家族とくつろぐ彼は、また違った一面を見せてくれました。職場の彼とはうってかわってジョークを連発。子どもたちへのまなざしは、一人の父親のものでした。

たですが、なかでも、ひき肉やナッツを包んだキャベツロールと、肉やドライフルーツの煮物は逸品でした。食後の紅茶に砂糖で煮詰めた薔薇の花びらを入れるなど、異なる食文化を堪能しました。

手料

理に舌鼓を打って

いと、玄関先でノックする音がしました。家族の皆さんのいたずらっぽい笑顔に誘われ玄関を明けてみると、そこには誰もおらず、小さな帽子が1つ残されているだけ。どうやら、この帽子の主は、向こう

うの柱でちらちらと頭をのぞかせながらこちらをうかがっている子どものようです。

お菓子をこの帽子のなかに詰めてあげ、同じ場所に戻し、何くわぬ顔で玄関を閉めるのが作法とか。もちろん、玄関が閉まるのを確認すると、持ち主の子どもはお菓子付きで帽子を取り戻すわけです(ハロウィンの「Trick or Treat」お菓子をくれないと悪戯するぞ)のようなものか?)。

また目を窓の外にやると、たくさんの子どものたちが小さく飛ぶ越え、木の間や道を駆け回っている姿が見えます。この風習には、「この1年の不幸をすべて火の中に封じ込めてしまおう」という意味があるそうです。

今回

の派遣は、私にと

って初めてのアゼルバイジャン訪問となりました。これを機会に、アゼルバイジャンの専門家と、日本で同じ課題に取り組んでいる方々とを橋渡しするような役割を果たせればと思っています。

